

研究者への扉

Knocking on the Door of Research, and Having it Opened

小舘香椎子 Kashiko KODATE

私は、付属中学から入学した日本女子大学の家政学部家政理学科の物理専攻をわずか6名の同級生とともに卒業した。現在所属する応用物理学会での女性研究者比率も4%にすぎないので、マイノリティーであることはとりたてて変わったようにも思われない。卒業に際して、助手として大学に残るようにと導かれたが、ポストの増員ができず、専任の物理担当教諭として付属高等学校に赴任することとなった。一見不運にも思えるこの就職だが、小学校卒業時から「教師」を将来の職業にと希望していた私にとっては、とてもありがたい実践の場となった。

それから3年後、女子大の助手に、との約束で退職願を出した後、増員が再び大学の事情で見送られ、その後なんとか東京大学工学部電子工学科の週3日の臨時勤務者として、採用の機会が得られたものの、私自身は目標を失い、大きな喪失感を味わっていた。ところが、そこに「教職経験者か大学院修了者にしか就けない専任助手のポストを引き受けてほしい」との思いがけない連絡が届いたのである。この電話が私にとって「研究者の道」に繋がる扉を開けてくれることとなった。幸運にも神山雅英教授の研究室に配属され、初めて生涯の師と研究テーマ「光（レーザー光）」に出会うこととなった。電子工学科がスタートした1960年は、レーザーが初めて世に出た年であるが、量子エレクトロニクスの研究室での5年間は、優れた若い研究者集団との出会い、旋盤からはじまる「物作り」や大型コンピューターのプログラミング習得など、研究創成の基礎を学んだ大変に貴重な時間だった。JJAPに最初の論文が掲載されたのは30歳、すでに2児の母で、研究者としては大変遅いスタートだった。しかし、育児と研究との両立の慌ただしい日々を過ごす私にとって、積み重ねによって得られた成果が大きな励みとなり、新たな研究意欲も生まれていった。そうして、1970年代の半導体レーザーの進展によるマイクロオプティクスの黎明期から今日まで、科学研究費・公募研究・委託研究などの支援を受けながら、回折光学素

子の物理的基礎研究を基盤としながら、光機能デバイスの設計と数値解析エンジンの開発、すばる望遠鏡用直視型分散素子グリズム、光波シンセサイザ、フォトニック信号処理応用、全光型顔画像認識システムなどのさまざまなテーマを通じて、進展著しい光エレクトロニクス領域の研究に次々かかわることができた。

こうした研究生活の傍ら、東大助手時代に結婚し、3人の子供の出産・育児というライフイベントも経験した。1980年に子供達を預けていた実母が他界してからは、スープの冷めない距離に住む実父の食事や身の回りの世話と看護を、それから7年続けるという日々も待っていた。買い物など、家族全員の協力をなげに強制しながらも、手作りの食生活を充実させたいという思いから、休日には何時間もかけて総菜作りをし、大きな冷凍庫も購入・活用した。学齢期前の末の子は、国内学会などにも伴い、夏休みには大学の研究室で何日も過ごさせたこともあった。春・夏の休みにはお互いを近くで感じ、向き会える機会として、家族旅行も必ず実行した。このように、研究生活の継続に不可欠な家族の理解と支援と、母親としての最低限度の務めとが双方向で行われるようになると、すべてに夢中で過ごした期間でもあった。その後も、上の2人の子が大学に進学してから、父が他界し空き家になった実家に、早稲田大学のアメリカ人留学生を毎年1人ずつ3年間受け入れることとなり、食事の世話は一向には楽にならなかった。しかし、「僕の顔を見ただけで、今日の僕の気持ちを当てるなんて、お母さんは物理学者ではなく心理学者だ」というアメリカ人の「息子」にも出会う機会を得、家庭を開放しながらの異文化交流は新鮮であった。その後欧州に遅しく留学した3人の子供たちにも道も開いたのだと思っている。

こうして「光とともに」過ごして来た研究・教育・家庭での刺激の多い豊かな日々を終えようとしている今、まだまだマイノリティーであり続ける科学技術分野における女性の活躍促進のため、今後も尽力し、自分自身もまた全力で歩み続けていきたいと感じている。



小舘香椎子 Kashiko KODATE

日本学術会議会員（第3部）
科学技術振興機構男女共同参画主監
日本女子大学名誉教授